亡命詩人、娼婦たち、それともナボコフ——間違えたのは誰か？
（『賜物』におけるある誤植をめぐって）

沼野 充義

ちょっと必要があって、図書館へ行って、校正の指南書・ガイド本をいろいろ見てみた。そのなかで、一番内容的にしっかりしていそうな本をぱらぱらめくっていたら、うしろに正誤表がはさみこんであって、これが相当の長さで、この本がメチャクチャ誤植だらけであることが判明した。まあべつに、いいのかな……。

（柴田元幸「猿の仕事 on the Web」2011.8.22）

ナボコフの長編『賜物』の第1章の終わり近くに、ゲルマン・イワノヴィチ・ブッシュというリガ出身の亡命ロシア語詩人が登場する。チェルヌィシェフスキー家の文学の夕べで新作を朗読する、忘れがたい人物だ（なぜ忘れがたいのかは、もう少し読み進めていただければわかるだろう）。このブッシュなる人物、作品はロシア語で書いているのだが、そのロシア語は発音も文法も珍妙だとされている。名前から判断して、彼はおそらく生粋のロシア人ではなく、ロシア語圏に帰化したバルト・ドイツ人ではないかと思われる。彼が朗読する「哲学的悲劇」では、海辺の小さな町にある「罪の通り」にたたずむ娼婦たちが、次のような会話をする。

第一の娼婦　すべては水。あたしの客のタレースはそう言うわ。
第二の娼婦　すべては空気。若いアナクシメネスはわたしに言った。
第三の娼婦　すべては数。あたしの禿げたピタゴラスが間違えることなんてありえない。
第四の娼婦　ヘラクレイトスはあたしを愛撫しながら、囁くの。すべては火。
道連れ（入場）　すべては運命。

（ロシア語原文に基づく邦訳。邦訳 104～105 ページ[1]）

[1] ナボコフ『賜物』沼野充義訳、河出書房新社（池澤夏樹=個人編集 世界文学全集 II-10）、2010年。これはロシア語原文からの翻訳である。以下本書から引用する場合は、単に「邦訳」として本文中にページ数を記す。

ナボコフのこの作品の出版史は少々複雑だが、もともとは 1937 年から 38 年にかけてパリの亡命ロシア雑誌『現代雑記』に連載され、ロシア語版の単行本はようやく 1952 年にニューヨークで出版された。つまり著者が『ロリータ』で世界的に有名になる遥か前に、ロシア語で書かれた長編である。その英訳が出たのは 1963 年。[2] マイケル・スキャメルという若いアメリカ人のロシア文学研究者に、ナボコフ自身が協力した「共訳」で、タイトルページにも "Translated from the Russian by Michael Scammell with the collaboration of the author" と明記されている。すでに『ロリータ』で国際的な注視の的となっていた亡命ロシア人作家が遥か昔にロシア語で書いた知られざる傑作が英訳されたとあって、当時、英語圏では大きな話題となった。『賜物』の同時代の受容や書評者たちの反応については、ユーリイ・レヴィングの『「賜物」への鍵』が詳細を究めているが、それによれば英訳刊行直後にアメリカ合衆国、イギリス、カナダなどで出た書評だけでも 100 点を超えているという。[3]

ところが、いま引用した娼婦たちの会話は、英訳の初版では以下のようになっていた。

FIRST PROSTITUTE
All is water. That is what my client Phales says.
SECOND PROSTITUTE
All is air, young Anaximenes told me.
THIRD PROSTITUTE
All is number. My bald Pythagoras cannot be wrong.
FOURTH PROSTITUTE
Heracles caresses me whispering "All is fire."
LONE COMPANION (*enters*)
All is fate.[4]

ギリシャ人名に通じた教養ある読者ならすぐに分かることだが、ここには明らかな間違いが二つある。一つ目は古代ギリシャの自然哲学の始祖タレースの名前が Thales ではなく、Phales となっていること。もう一つは、英語では Heraclitus と綴られるべき哲学者

[2] Vladimir Nabokov, *The Gift*. Trans. from the Russian by Michael Scammell with the collaboration of the author. New York: G. P. Putnam's Sons, 1963. なお、マイケル・ジュリアーによる詳細な書誌目録によれば、本書の刊行日は正確には 1963 年 5 月 27 日である（See: Michael Juliar, *Vladimir Nabokov: A Descriptive Bibliography*. New York and London: Garland Publishing Inc., 1986, p. 145）。

[3] Yuri Leving, *Keys to The Gift: A Guide to Vladimir Nabokov's Novel*. Boston: Academic Studies Press, 2011, p. 436.

[4] Nabokov, *The Gift*. New York: G. P. Putnam's Sons, 1963, p. 79.

ヘラクレイトスの名前が、Heracles（ヘラクレス）となっていること。

常識的には、これらの誤植はロシア語から英語への翻訳の際に生じた単なるミスと考えられるだろう。「タレース」の場合は、ギリシャ語の「テータ」の文字θ（大文字形ではしばしばΘ。ラテン文字では通常thがこれに対応する）がロシア語でどう翻字されるかという問題が絡んでいる。ロシア語にギリシャ語起源の単語が取り入れられた場合、ギリシャ語のθは、古くはロシア語の旧正字法では同形の文字フィータに対応させることがしばしばあった。例えば使徒トマスの名前はギリシャ語で綴ればΘωμάς で、ラテン語ではThomasだが、ロシア語ではΘома（フォマー）となる。ただし、この例からもわかるように、ロシア語ではθの文字の音価は[f]であり、ロシア語のアルファベットにはその他に[f]音を表すΦ（エフ）という通常使われる文字がある以上、それとは別にθの文字を使うのは、その単語が「ギリシャ語起源」であることを示すいわば飾りのようなもので、実用的な意味はなく、19世紀のロシアでもこの文字が実際に使われる例は稀だった。「フォマー」という名前にしても、わざわざθの文字を使わずに、普通にФомаと綴ってもよかったのである。そして、ロシア革命後の新正字法ではθの文字は無用の長物として完全に廃止され、すべてΦ（エフ）の文字に置き換えられた。

哲学者の名前タレースΘαλής について言えば、これは英語ではThalesとなるが、ロシア語の新正字法ではФалес（旧正字法ではΘалес）と綴られ、新旧いずれの正字法の場合でも「ファレース」と発音される。そのロシア語の新正字法の綴りから英訳する際に、錯覚が生じて、Thalesではなく、ついうっかりPhalesとしてしまうことは、いかにもありそうなことである。ロシア語のΦの文字は形からもわかるように、もともとギリシャ文字のΦ（ファイ）から来ており、ラテン文字でphという綴りが現れるギリシャ語起源の単語の多くにおいて、ロシア語ではこのΦが使われるからである。

ヘラクレイトスーヘラクレスについては、誤植や綴りの間違いというよりは人名の取り違えと言うべきかもしれない（ただし、本稿では便宜上、これも誤植と呼ぶことにする）。ヘラクレイトスは火をすべての根源と考えた、「万物は流転する」で有名な哲学者だが、Heraclesはギリシャ神話の英雄ヘラクレスのことであって、綴りは似ているが、まるっきり違う。欧米の教養人にとっては、この二つを混同したら相当恥ずかしいことだろう。とはいえ、事情は単純なことかもしれない。互いに綴りが似ていて紛らわしい名前だから、訳者がうっかり取り違え、アメリカやイギリスの教養ある編集者も校正者も気付かないまま印刷に回してしまったということだろうか。

単なる誤植だろうという一番穏当な推測を裏付けるために、まずロシア語の原文を挙げておこう。これを見れば、ロシア語では「タレース」も「ヘラクレイトス」も正しく綴られていることが分かる。

Первая Проститутка

Всё есть вода. Так говорит гость мой Фалес.

Вторая Проститутка

Всё есть воздух, сказал мне юный Анаксимен.

Третья Проститутка

Всё есть число. Мой лысый Пифагор не может ошибиться.

Четвертая Проститутка

Гераклит ласкает меня, шептая: всё есть огонь.

Спутник (*входит*).

Всё есть судьба.[5]

このロシア語テキストは、サンクト・ペテルブルクのシンポジウム社から出版されたナボコフ・ロシア語時代全5巻著作集の第4巻から引いた。[6] この本は今日ナボコフのロシア語テキストとしては基本とされるものである。ここで『賜物』のロシア語テキストについて触れておけば、基本的にこのシンポジウム社版以外に、3つ、参照すべき版がある。それは(1)亡命ロシア人がパリで出していた文芸誌『現代雑記』(«Современные записки»)第63号から第67号（1937-38）に5回にわたって連載された雑誌初出版（ただし、連載時には第4章は編集部に拒絶されたため、発表されていない）、(2)1952年、ニューヨークのチェーホフ出版社によって刊行された単行本（第4章も含む、初めての完全版）、(3)1975年にアメリカのアーディス社（アメリカ合衆国ミシガン州アナーバー）によって刊行された単行本第2版である。筆者は『賜物』邦訳の際にシンポジウム社版を含む4つのすべての版を比較検討したが、[7] 諸版の間の異同はごく軽微なものでしかない。ただし、雑誌初出版のみ旧正字法を使い、1952年のチェーホフ出版社版以降は新正字法に切り替わっている。ここで引用した「罪の通り」の娼婦たちの会話に関しては、4つの版の間にレイアウト以外の異同はまったく見られないが、旧正字法を使っていた雑誌初出版において「タレース」はフィータの文字を使って Ѳалесъ と綴られていた。

いずれにせよ、ロシア語原文でギリシャ人名がすべて正しく綴られていた以上、英訳は当然誤植だということになるだろう。このような間違いに、訳者も編集者も校正者も気付

---

[5] *Вдадимир Набоков,* Собрание сочинений периода в пяти томах, том IV. Санкт-Петербург: Симпозиум, 2000, стр. 252.

[6] ただし、このシンポジウム社版は、現代ロシアの編集者の裁量によってレイアウトが変えられ、句読法までごくわずかだが変わっているところがあるため、この箇所の引用についても、レイアウトは1975年アーディス社版に従った。См.: *Владимир Набоков,* Дар. Ардис: Анн Арбор, 1975, стр.77.

[7] これらの諸版についてより詳しくは、沼野訳『賜物』(河出書房新社、2010年)の訳者解説(601-603ページ）を参照。

かないで印刷に回してしまうということがあり得るのだろうか、ということは少々疑問ではあるが……。

実際、この誤植に即座に気付いた、眼光鋭い博識な書評者がいたのだ。『賜物』のイギリス版[8]が出たのは1963年11月のことだが（ジュリアーの書誌目録によれば、1963年11月8日）、それに合わせてほぼ同時に『タイムズ・リテラリー・サプリメント』（以下、*TLS*と略記）の1963年11月7日号に匿名の書評が掲載された。これは短いながらも、ナボコフの複雑で難解な小説をきちんと評価したおおむね好意的なものだった。しかもこの匿名書評家は、ナボコフのロシア語の原文が読める人物らしく、相当な学識があることがうかがわれる（ちなみに*TLS*ではこの時期はまだ基本的にすべての書評が匿名で行われていた。匿名書評廃止の方針が打ち出されるのは1974年のことである）。しかし、「好意的」な褒め言葉だけで終わらないのが、この書評紙の厳しいところ。書評家は最後にまる一段落を費やして、誤植に関する少々嫌味な苦言を呈している。

> The author tells us in his foreword that he himself has 'carefully revised' the translation. Not carefully enough: we are indebted to the translators for some howlers that would have delighted Fyodor if he had detected them in Chernyshveski. At one point the Thales and Heraclitus of the original appear farcically as Phales (the well-known Symbolist?) and Heracles; at another Apelles is transformed into Apuleius.[9]
>
> 著者は序文において、訳文には自分で「注意深く」手を入れたと言っている。だが、それでも注意が足りなかった。訳者たち（スキャメルとナボコフの二人を指すので、複数形になっている—沼野注）のおかげで、傑作な間違いがいくつか見られるのだ。もしもフョードルがチェルヌィシェフスキーの著作の中に発見したら、さぞ喜びそうな類のものだ。ある所では原文のタレースとヘラクレイトスがファレース（これはあの有名な象徴主義者のことか？）とヘラクレスとなっていて笑ってしまうし、別のところではアペレスがアプレイウスに変身している。（拙訳）

さすが書評紙の粋とも言うべき*TLS*に掲載された文章だけあって、この箇所で駆使されているレトリックはなかなか高度である。少々注釈をつけないと理解しにくいだろう。フョードルとは『賜物』の主人公であり、この長編の第4章は19世紀ロシアの革命的思想家チェルヌィシェフスキーについて彼が書いた伝記小説になっている（つまり「小説内小説」である）。しかし、その書き方は辛辣極まりないもので、ロシアの左翼的知識人た

---

[8] Vladimir Nabokov, *The Gift*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1963.

[9] Unsigned, "Russian Romp." *Times Literary Supplement*, November 7, 1963, p. 903.

ちが崇拝する受難した先駆者に対する敬意はほとんど感じられず、むしろチェルヌィシェフスキーを徹底的にコケにし、彼の無様さや不器用さを強調し、彼の著作のおそるべき悪文ぶりを笑いものにするといった風なのだ。だから、もしもそのフョードルがチェルヌィシェフスキーの著作の中に、こういった「噴飯ものの間違い」(howlers)を見つけたら大喜びするだろう、という理屈になる。ちなみに、これほどチェルヌィシェフスキーを揶揄することは、さすがに亡命ロシア人社会にあっても一線を越えるような偶像破壊、いや「冒瀆」と見なされた（亡命ロシア人の大部分は、ロシア革命後樹立されたボリシェヴィキ政権に敵対していたわけで、チェルヌィシェフスキーのような「革命的民主主義者」は広い意味ではロシア革命への道を切り開いた人物だから、亡命ロシア人社会としては本来それほど崇拝する義理はない。それがナボコフによる偶像破壊に対して待ったをかけたのは、皮肉な話である)。『賜物』のロシア語版を最初連載していた亡命ロシア雑誌『現代雑記』編集部は結局、チェルヌィシェフスキーの伝記となっている第 4 章の掲載を拒否したため、第 4 章を含む『賜物』の全体が初めて活字になるのは、1952 年、ニューヨークのチェーホフ出版社が単行本を出したときだった。『ロリータ』で世界を騒がせた作家は、その遥か前に、亡命ロシア人社会において「予行演習」をしていたのである。『賜物』の中でもフョードルは、どうしてよりによってチェルヌィシェフスキーの伝記を書くのかと聞かれて、「射撃の練習です」と謎めいた答えをしているが（第 3 章、邦訳 308 ページ)、これは予言的な言葉になった。

ところで、ここに出てくる howler という単語が少々目を惹く。これは単なる間違ではなく、しばしば人の笑いを呼び起こすような、噴飯ものの傑作な言い間違い・書き間違いの類について使われる単語で、かなり強いものだろう。この程度の間違いにどうして書評者はこのような単語を使ったのだろうか。ここで思い出されるのは、『賜物』の英訳において、この単語が、トゥルゲーネフとトルストイの自然描写について使われていたということだ。主人公フョードルは、偉大な生物学者・鱗翅類学者であった父のことを回想しながら、こう言っている。

> 'My father used to find all kinds of howlers in Turgenev's and Tolstoy's hunting scenes and descriptions of nature, and as for the wretched Aksakov, let's not even discuss his disgraceful blunders in that field.'[10]
>
> 「父は、トゥルゲーネフとトルストイの狩りの場面と自然描写はありとあらゆる噴飯ものの間違いだらけだと言っていたものです。アクサーコフにいたってはどうしようもない、この

[10] Vladimir Nabokov, *The Gift*. Penguin Books (Penguin Classics), 2001, p. 73.

分野であの男が犯したばかばかしい間違いは恥ずかしくて話にもならない、ともね」（拙訳）[11]

なお、この箇所は、ロシア語原文と英訳の間にほんの少しだけ違いがある（英訳では「狩りの場面」という言葉が付け加えられているほか、文章後半部の語調がだいぶ変わっている）。いかに忠実な翻訳であるとはいっても、この程度の違いはほとんど毎行あると考えたほうがいいだろう。ロシア語原文と英訳の間の微妙な「違い」を知っていただくために、ロシア語原文に忠実な拙訳も掲げておく。

「父はトゥルゲーネフとトルストイの自然描写は目に余る間違いだらけだと言っていました。そしてアクサーコフになるともう何をか言わんやだ、と付け加えたものです。『恥さらしもいいところだ』と言うんですね」（第1章、邦訳115ページ）

TLS の書評に戻ると、ここにはもう一つ、少々謎めいた判じ物のような言い方が出てくる。Thales を Phales にしてしまった誤植について、「あのよく知られた象徴主義者？」と括弧内にコメントしている箇所だ。はたして Phales という名前の有名な「象徴主義者」など、文学史上・芸術史上いただろうか？　少なくともロシアでは思い当たる人物はいない。私自身長いこと分からず、自分の無学を恥じるばかりだったのだが、あるときふと思い当たった。機知に富んだイギリスの書評家がひょいと挟んだ言葉だもの、あまり真面目に考えすぎてはいけない。Phales という人名は、綴りからも発音からも当然 phallus（ファロス、男根）を連想させるだろう。そして、精神分析などで使う決まり文句には phallic symbol というものがある。これは男根を連想させるものを指す言い方で、ナボコフが大嫌いだった俗流フロイト主義者に言わせると、摩天楼でも、葉巻でも、マイクロフォンでも、すべてこの「男根の象徴」になってしまうのだ。というわけで、書評者はちょっとひねって、ファロスを暗に念頭に置きながら、Phales というのはあのよく知られた「（男根）象徴主義者」のことか、と洒落てみたのだ。この種のことはあまり露骨に言うと *TLS* の紙面に相応しくない下品な文章になってしまう。それを避けながらの、なかなか優雅なレトリックではないか。

さらにこの書評は、「アペレス」であるべきところが「アプレイウス」となっていると

---

[11] ちなみに、英語からの先行訳では、この箇所は howler の意味を取り違えたために、「父はよくツルゲーネフやトルストイの狩猟の場面や自然描写の場面には、あらゆる種類の動物が現れると言って感心していましたよ」となっている（ナボコフ『賜物』大津栄一郎訳、福武文庫、1992年、上巻、122ページ）。howler には確かに「吠える人・獣」という意味もあるのだが……。howler の訳がそれこそ「噴飯ものの間違い」になってしまったのは、なんとも愉快ではないか。この誤訳についてはすでに若島正による的確な指摘がある。若島正『乱視読者の冒険』自由國民社、1993年、253ページ。

いうとも指摘している。この誤植が出てくるのは、『賜物』第4章をなすチェルヌィシェフスキー伝の中、「アペレスのアトリエを覗いて、自分に理解できないものにけちをつけた靴屋は、きっと、ろくでもない靴屋だったのだろう」（邦訳382ページ）というくだりである。このアペレスというのは、あのプリニウスが『博物誌』第35巻で詳しく紹介している古代ギリシャの画家である。プリニウスによれば、ある靴屋がアペレスの描いた絵の中のサンダルの不備を指摘して、鼻高々になったのに対して、アペレスは「靴屋はサンダルよりも先のことまで批評してはならぬ」[12]と言ったという。ただし、ナボコフが念頭においているのは、おそらくプリニウスというよりは、この逸話をもとにしてプーシキンが書いた寸鉄詩「靴屋」（1829）のほうだろう。これは自分に理解できないものを批評しようとする人間、自分の能力を超えたことに手を出したがる半可通を皮肉った詩で、『賜物』の文脈では、詩のリズムの基本も理解していないのに詩作に手を出してむちゃくちゃな詩を作ったチェルヌィシェフスキーを揶揄するために持ち出されている。一方、アプレイウスは言うまでもなく、『黄金のロバ』の著者として名高い古代ローマの著作家だから、アペレスと取り違えるのもhowlerのうち、ということになるだろうか。

それにしても、比較的短い書評の最後の一段落をすべて「噴飯ものの間違い」にあてて締めくくるというのは、親切というよりは、かなり辛辣なことではなかろうか。分厚い何百ページもある長編全体から見れば、ごく些細な箇所なのだから、はたしてここでそんな形で指摘する必要があったのか、少々疑問にも思える。フョードルの父がロシア作家たちの自然描写のいい加減さを批判する厳格さと辛辣さは、ナボコフ自身のものでもあった。ナボコフ自身が作中人物の口を借りて、生物学的に不正確きわまりないトゥルゲーネフやトルストイ、アクサーコフなどを酷評するのに使ったhowlerという言葉を、書評者はそのまま繰り返して翻訳の杜撰さをついたわけである。このような書評が権威ある*TLS*に載ったのを見て、ナボコフ自身相当かちんと来たに違いない。いや、著者以上にもっと慌てたのは、担当編集者だったろう。編集者はこのような誤植を見逃したことによって、自分の無教養をさらけ出してしまったわけだし、イギリスの一流文芸出版社としてはこのような誤植のある本を出すのは恥ずかしいことだったに違いない。じつは『賜物』イギリス版のハードカバーの第2刷は、書評で指摘された誤植をすべて訂正したうえで、第1刷のわずか一ヶ月後の1963年12月に出版されているのだ。それに対して、1963年5月にニューヨークのパトナム社から出たアメリカ版ハードカバーのほうは、私の調べた限りでは、増刷された形跡はない。『賜物』は相当難解な、読み通すことも困難な小説なので、『ロリータ』のように爆発的に売れるなどということはまず考えられない。そこで、ここから先は私の勝手な憶測だが、イギリスでのこのように迅速に増刷されたのは、好評で売り切れ

---

12 『プリニウスの博物誌』第Ⅲ巻、中野定雄他訳、雄山閣出版、1986年、1425ページ。

たからではなく、ひょっとしたら誤植を訂正するだったのではないだろうか。

しかし、これで誤植問題は一件落着というわけにはいかなかった。むしろ、この先に予期せぬ面白い展開があったのだ。*TLS* に書評が出てから一月ほど後、今度はアメリカで『ザ・ニューヨーク・レヴュー・オヴ・ブックス』(以後、*NYRB* と略記する) の 1963 年 12 月 12 日号で、ダピー (F. W. Dupee) という批評家が、いやこれは翻訳者による間違いなどでもなければ誤植でもない、作中人物のブッシュという亡命詩人が無教養なために間違えているのだ、という説を発表するのである。いや、「説を発表する」というほど大げさなものではなく、例のブッシュの詩の一節を「純然たるファルス」として引用したうえで、"It is Busch's fault, not the proofreader's, that Thales becomes Phales and Heraclitus becomes Heracles" (タレースがファレースに、ヘラクレイトスがヘラクレスになっているのは、校正者の過失ではなく、ブッシュの犯した誤りである) という脚注をつけているのだ。[13] ダピーは『賜物』刊行直後から出続けた書評の数々に目を通してきたという趣旨のことをこの文章で言っているので、当然 *TLS* の書評も読んでいた可能性が高い。いや、タイミングを考えれば——これもまた私の想像だが——本文を書き上げた後に、*TLS* の書評者の「噴飯ものの間違い」の指摘を見て、ぎりぎりの段階で、注の形で上記の一文を滑り込ませ、*TLS* の書評に対して密かに反論を試みたのではないだろうか。ちなみに *NYRB* は 1963 年に創刊されたばかりのアメリカの書評専門紙であり、1902 年創刊のイギリスの老舗 *TLS* に対抗して新たな書評のスタイルを作り出そうと意欲に燃えていた。想像をたくましくして、少々大げさに言えば、誤植の指摘をめぐって *TLS* と *NYRB* の間に——誰も気付かないほどのささやかな書評紙の片隅で——対決の火花が散ったということではないか。

TLS の書評者はロシア語が読めるらしく、ロシア語の原文と比べたうえで、英訳にはギリシャ人名に誤植があると指摘した。それに対してダピーは、ロシア語を知らないと認めたうえで論評している。明らかにダピーのほうが立場が弱いのだが、そうであるにもかかわらず、彼が間違いは校正者のせいではなく、ブッシュのせいだと断じたのはどうしてなのか。ダピーの評論は、ナボコフにおける詩と散文の関係に着目した、当時のナボコフ批評にあって極めて先駆的なものだが (『ロリータ』で有名になったナボコフはもっぱら小説家として知られていたので、欧米で彼の詩に着目する批評家はまだほとんどいなかったのである)、ブッシュの詩句における「誤植」に関して独自の判断を下した理由については、具体的には説明していない。とはいうものの、彼の評論を読めば、おおよそ次のよ

---

[13] F. W. Dupee, "Nabokov: the Prose and Poetry of It All," *The New York Review of Books*, December 12, 1963. (オンライン・アーカイヴで閲覧)

うな論拠が読み取れるだろう。

ダピーは主として『賜物』に焦点を合わせ、この小説において詩に大きな比重があるにも関わらず、結局これがナボコフにおける詩との一種の「出会いと別れ」(hail and farewell)になっているのに、『賜物』の数ある書評者たちは誰もこの点を指摘していない、と不満を述べる。そのうえで、『賜物』にちりばめられた様々なタイプの詩の鮮やかな一例として、ブッシュの詩の一節を取り上げるのである。注意しなければならないのは、ブッシュの作品が文学的趣向を凝らした傑作などといえた代物ではなく、ブッシュ自身がお笑いぐさでしかない自称詩人として描かれていることだ。ダピーはその点を正確に読み取ったうえで、文法もめちゃくちゃ、支離滅裂な詩を書いて自己満足している滑稽なブッシュだからこそ、ギリシャ人名に関する教養も当然ないだろうと推定し、ギリシャ人名の間違いはブッシュの無知ゆえだと判断したのだろう。つまり、この仮説に従えば、「誤植」はそもそもブッシュという亡命詩人を造形したナボコフ自身の意図であるということになる。

ロシア語の原文を唯一正しいものと考える立場からは、ナボコフの作者としての意図ははっきりしているのだから、このような仮説は成り立たない。しかし、ダピーの読みはブッシュが登場する場面の文脈全体を見渡したとき、正しいと言わざるをえない。妙な言い方になるが、ナボコフのロシア語原文よりもある意味ではこの場にとって「正しい」とも思えるのだ。少し長い引用になるが、ブッシュの登場する場面を確認してみよう。ロシア語原文に基づく拙訳を引用する。

> (……)ワシーリエフが席から立ち上がり、商人や弁士によく見られるような身のこなしで、テーブルの上板に指で軽く触れて身を一瞬支え、開会を宣言した。「ブッシュ氏に」と、彼は付け加えた。「新作の哲学的悲劇を朗読していただきます」
>
> ゲルマン・イワノヴィチ・ブッシュはがっしりした体つきの、感じのいい内気そうな初老の男だった。出身はリガで、顔はベートーベンさながら。彼はアンピール様式のテーブルに向かって腰をおろし、痰を切るように大きな咳払いをし、原稿を広げた。その手の震えがはっきり見え、朗読の間中震えが止まることはなかった。
>
> 行く手に災いが待ち構えていることが、のっけから感じられた。朗読者の珍妙な発音は、意味不明の内容ととうてい両立しがたいものだった。プロローグからいきなり、ただひとりで道を行く、旅人(プートニク)ならぬ「孤独な道連れ(スプートニク)」というものが出てきて、フョードル・コンスタンチノヴィチは、ひょっとしたらこれは形而上学的なパラドックスであって、まさか背信的な過ちではないのではないかと期待したが、それも空しかった。「町の警備隊長」はこの人物を通そうとせず、何度も「手前はすべからく通れぬぞ」などと繰り返した。舞台となるのは海辺の小さな町で(「道連れ」は一人で後背地(ヒンターランド)からやって来た)、ギリシャ船の乗組員たちが飲んだくれ

ていた。そして「罪の通り」ではこの手の会話が聞かれた。

第一の娼婦　すべては水。あたしの客のタレースはそう言うわ。
第二の娼婦　すべては空気。若いアナクシメネスはわたしに言った。
第三の娼婦　すべては数。あたしの禿げたピタゴラスが間違えることなんてありえない。
第四の娼婦　ヘラクレイトスはあたしを愛撫しながら、囁くの。すべては火。
道連れ（入場）　すべては運命。

その他に合唱が二組あり、そのうちの一つはどうしてそうなるのか、ド・ブロイの波動と歴史の論理を表していて、もう一つのまともな合唱のほうがそれと議論をした。「第一の水夫、第二の水夫、第三の水夫」とブッシュは、縁（へり）が濡れた感じの神経質そうな低音で登場人物を数え上げた。さらに花売り女たちが登場した。「百合売り女」、「スミレ売り女」、「いろんな花売り女」である。そのとき突然何かが崩れた。聴衆の中で地滑りが始まったのだ。
（中略）悲劇のばかばかしい象徴性が深まり、より複雑に、訳のわからないものになればなるほど、地下で荒れ狂いながらも痛ましいほどに抑えつけられた叫び声はますます恐ろしい勢いで出口を求めるようになり、聴衆の多くは見ることを恐れてすでに身をかがめ下を向いてしまっていた。そして広場で「お面舞踏会」が始まったとき、突然誰かが――ゲッツだろう――咳をし、その咳とともになんだかおまけのように悲鳴が飛び出した。そのときゲッツは両手で顔を隠し、しばらくしてから手の後ろから無意味に明るい顔と湿ったはげ頭を再び覗かせた。一方、ソファではリュボーフィ・マルコヴナの背後でタマーラがあっさり横になり、まるで陣痛に苦しむようにのたうち回っていた。身を隠すものを失ったフョードル・コンスタンチノヴィチは自分の内側から湧き起こるものを無理やり無音のまま保つことに疲れ果て、涙をあふれさせていた。（邦訳 104-106 ページ）

このあたりの描写もさすがにナボコフだけあって、手が込んでいる。不注意な読者は気づかない可能性さえあるのだが、ここで聴衆たちは皆ブッシュの詩のあまりの滑稽さに笑い出しそうになり、それを堪えようと必死になっているのである。しかしナボコフは注意深く「笑う」という動詞を避け、逆に、ブッシュの自称「悲劇」に相応しい「恐れ」「悲鳴」「苦しみ」「涙」といった一連の悲劇的な語彙によって描写を統一している。いちいち説明しないが、ブッシュの使うロシア語には文法や発音の誤りも少なくない。言い訳めくが、拙訳の中の日本語が変な箇所は、ブッシュの変なロシア語を反映させた結果である。なお、さらに細かいことを付け加えれば、この部分の英訳はロシア語原文ほどには「変な度合い」は高くない。わざと変な言葉を使うという実験は母語の場合自信を持って行えるが、非母語である英語になると、たとえナボコフであってもなかなかそうはいかない。単に英語が下手なのかと思われる危険があるうえ、言葉をできるだけ滑らかにしようとする

英米の辣腕編集者のプレッシャーも高いせいだろう。このブッシュの「詩」に「純粋なファルス」を見てとり、ギリシャ人名がめちゃくちゃになっていたほうがこの場に相応しいと考え、それがナボコフ一流の文学的手法であろうと考えたダピーはナボコフの創作技法のよき理解者だった。

日本でこのダピーの指摘に目をとめ、さらに推論を大胆に推し進めたのが、日本においてナボコフをいち早く評価した文学の目利き、丸谷才一だった。彼は「故国の言葉と異国の言葉についてのノート」というエッセイ（『季刊世界文学』7 号、1967 年秋）の中で、件の娼婦たちの会話の一節を引用したうえで、次のように議論を展開する。これまた少々長くなるが、大変興味深い論点を含んでいるので引用する。

> 実を言ふとこのくだりは、ぼくが『贈り物』（『賜物』のこと——沼野注）のなかで非常に気に入つてゐる箇所の一つなのだが、ダピーの『猫たちの王』[14]という評論集のなかに収められてゐるナボコフ論のなかにこのくだりが引用してあつて、そのこと自体は非常に嬉しかつたけれど、奇妙な註がついてゐるのでびつくりしてしまった。ダピーの註といふのは、「ヘラクレス」といふ言葉のところにアステリスクが打つてあつて、脚注にこう書いてあるのだ。「ターレスがファーレスになり、アナクシメネスがアナクシミネスになり、そしてヘラクレイトスがヘラクレスになつているのは、校正者の誤りではなく、ブッシュの誤りである。」
> （中略）
> 問題の箇所は校正者の誤りでもなければ（これはダピーの言ふ通り）、ブッシュの誤りでもない。誤つているのはブッシュの悲劇の作中人物たち、つまり三人の娼婦であつて、その言い違へのおもしろさこそは劇作家ブッシュの狙つた効果にほかならない。ソクラテス以前の哲学史は英文学の教授にとつては常識だらうが、娼婦にとつてはうろ覚えの知識にすぎない。だから彼女らは、ターレスとファロス（男根）とのカクテルをこしらへたり、ヘラクレイトスを神話の英雄に仕立てたりするのである。アナクシメネスがアナクシミネス（Anaximines）[15]になるのは、たぶん examine（検査する）の三人称単数現在のときの examines とこんがらかつて

---

[14] F. W. Dupee, *"The King of the Cats" and Other Remarks on Writers and Writing*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1965. 本書には前出の *NYRB* 初出ナボコフ論が収録されている。

[15] ここで私がまだ調べ切れていない不思議なディテールが一つある。アナクシメネスという人名の誤植についての指摘は、確かにダピーの単行本評論集『猫たちの王』に再録されたナボコフ論への脚注には含まれているのだが、先の引用からもわかるように、*NYRB* 初出のときには含まれていない。そもそも私が参照し得た『賜物』英訳のすべての版（アメリカ・イギリスの初版を含む）において、アナクシメネスは正しく Anaximenes と表記されていて、Anaximines と誤記されているものは一つもない。ダピーは *NYRB* 初出の評論を単行本に再録する際に、目の錯覚を起こして、アナクシメネスも誤記されていると思い込み、付け加えてしまったのだろうか。それとも初版以後のいずれかの版で、アナクシメネスを誤記している、私がまだ未見のものがあるのだろうか。いずれ突き止めたいとは思っているが、いまのところ謎である。

いるのではないだらうか。そのときAnaないしAnaxは、言ふまでもなくanus（肛門）のほのめかしとならう。[16]

丸谷はこの引用箇所の後に、さらに「かういふ、あるいは神話的な、あるいはエロチックな、言葉あそびがジョイスを想はせることは言ふまでもない」と続ける。まさに日本のJoyceanとも呼ぶべき作家ならではの深読みだろう。ファロスだけでなく、アヌスへの仄めかしまでここに読み取ったのは――これこそナボコフ自身が忌み嫌っていた俗流フロイト主義というものだが――炯眼である。

ただし、この場の炯眼さは――『賜物』という極めて難解な作品が、初訳の困難さの刻印を押された翻訳で紹介されたばかりの頃[17]だったせいもあり――少々空回りしているようでもある。ここでブッシュという自称詩人がいかに滑稽な存在で、彼の書いているものがいかにむちゃくちゃか、全然考慮に入れられていないのがまず不思議である。そして娼婦たちにとって古代ギリシャの哲学者たちはここでは商売のお得意さん、つまり「自分の男」であるということも、忘れてはならない。彼女たちにとって、この男たちの名前は、哲学史の教科書で知ったうろ覚えのものなどではないのだ。

となると、誤りが校正ミスによるものではないとするならば、間違えたのはやはりダピーの指摘の通り、ブッシュだと考えるのが妥当な線だろう。その推論はナボコフの作品解釈のためには確かに魅力的な可能性を示すものだが、問題は、ロシア語原文ではギリシャ人名は正しく表記されているという厳然たる事実である。英訳の間違いが単なる誤植ではないと推論するのは、やはり暇人の妄想なのだろうか。

ナボコフに携わっていると、こういう細かいことがやたらに気になり、際限なく調べ続けたくなるものだ。私も何年間かずっとこの問題を考えてきた。ナボコフを多少なりとも知っている者として抱く当然の疑問は、ロシア語原文から英語に訳した際生じた勘違いないしは誤記だとしても、天才的な博覧強記を誇るだけでなく、文章の細部にいたるまで透徹した観察力を発揮して彫琢するあのナボコフが、こんな間違いを校正の際に見逃すだろうか、ということだ。そのうえ、英米の一流文芸出版社の教養ある編集者や校正者も、ギリシャ・ラテンの人名に通じているはずだから、やはり彼らがそろいもそろってこういう誤記に気付かないということがあるだろうか。

ナボコフ自身がいかに細心の注意を払って校正をし、一字一句にいたるまで厳密に点検したかということについては、『ナボコフ書簡集』の序文で息子ドミトリーが力説している通りである。ドミトリーは「時折の誤植その他の誤りは、言うまでもなく、どんなに注

---

16 丸谷才一『遊び時間』中央公論社（中公文庫）、1981年、118-119ページ。

17 『賜物』の本邦初訳は、大津栄一郎の訳により、白水社の「新しい世界の文学」シリーズの一冊として、1967年2月10日に刊行された。

意深くチェックされたテクストにもつきものではありますが、ナボコフは、こういった不運を回避するために、打てる手はすべて打つ作家でありました」と言い、「まさに生まれようとしている作品に、ナボコフがいかに細心の注意を払っていたかを例証するために」[18]この書簡集に、ナボコフが『ロリータ』初版のゲラに加えた修正のリストを収録している。残念ながら『賜物』校正関係の書簡はここには収録されていないが、ナボコフがどれほど真剣に校正に臨んでいたかはよく分かる。

ここで少し、『賜物』英訳作業の実態と、アメリカ人の共訳者マイケル・スキャメルのことも考えなければならないようだ。英訳の事情についてはナボコフ自身が英訳への序文（河出版の拙訳では、581～584ページに収録）で多少説明しているように、第1章だけは作家の息子、ドミトリー・ナボコフ、それ以外はマイケル・スキャメルが担当して下訳を作り、その訳稿をナボコフ自身が緻密に点検して推敲を加えるという形で英訳の最終版が準備された。1935年生まれのスキャメルは当時まだ20代半ば、コロンビア大学の大学院生で、翻訳家・文筆家としてはもちろんまだまったく無名だった。そんな彼に共訳の白羽の矢が立ったのは、彼が抜群に優秀な大学院生だったからだけではない。まだ若くて従順なので、共訳者、いや実質的には「下訳者」として使いやすい、というナボコフ側の思惑があったように想像される。スキャメルはナボコフ作品の翻訳の仕事について、後に「奴隷の道」[19]として回想している。実際、スキャメルの準備した訳稿にナボコフが一切相談せずに一方的に手を入れるというやり方で最終稿が作られたようで、ナボコフがどのような修正を加えたかは、アーカイヴに保存されている原稿からうかがい知ることができる。それを詳しく調査したマリーナ・グリシャコヴァという研究者によれば、翻訳もまたナボコフにとっては「自己注釈」の形態であったという。[20]

『賜物』英訳のタイプ原稿（下訳にナボコフ自身が直筆で朱を入れているもの）は、現在、ニューヨーク公立図書館のバーグ・コレクション（Berg Collection）に収蔵されている。私自身はまだそれを調べたことがないが、カナダのナボコフ研究者ユーリイ・レヴィングが提供してくれた件の娼婦たちの会話のページの貴重なコピーがあるので、それを資料として以下のページに掲載する。ただし、これはマイケル・スキャメルによって準備された英訳タイプ原稿の一部と思われるが、ナボコフ自身が言っているように、第1章は息子のドミトリーが訳したはずなので、ことによったらドミトリーによるものかもしれない。

---

18 ドミトリ・ナボコフ／マシュー・ブロッコリ編『ナボコフ書簡集』1、江田孝臣訳、みすず書房、2000年、ixページ。

19 Michael Scammell, "The Servile Path," *Harper's Magazine*, May 2001. 同誌のオンライン・アーカイヴで閲覧。URLは、http://harpers.org/archive/2001/05/the-servile-path/

20 Марина Гришакова, "*Дар* В.Набокова: опыт совместного перевода," *Studia Russica Helsingiensia et Tartuensia VII: Переломные периоды в русской литературе и культуре.* Helsinki, 2000, стр. 311-325.

[21]あるいはドミトリーの下訳をさらに、スキャメルが修正しながらタイプに打ち直したものかもしれない。

このコピーを見てすぐに分かるのは、第1に、ギリシャ人名のタレスとヘラクレイトスが「ファレス」「ヘラクレス」と「誤訳」されれているのに（つまりこれはもともと下訳者のミスであったことがわかる）、ナボコフはそれを訂正していないということ。第2に、それ以外の箇所にはかなり徹底的に直しが入っていること、である。この二つを合わせると、これほど細心にゲラをチェックしていたナボコフが、ギリシャ人名の明らかな「誤訳」に気付かなかったのは変だ、と考えざるを得ない。そこで――拙文で何度も繰り返さしてきた通り、これもまたナボコフ読みの想像に過ぎないのだが――頭に浮かぶのは、こういうことだ――ナボコフは下訳者の間違いに気付いたのだが、このままのほうが面白いということに思い当たり、あえて直さなかったのではないか？　もしもそういうことをすれば、ロシア語原文とは違ってしまうが、英訳の際に原文に手を入れるのは作者の特権である。

牽強付会な仮説と思われるだろうか。しかし、ナボコフの作品を知る者にとって、これは必ずしも突拍子もない憶測ではない。文章の細部を舐めるように愛し、科学者以上に厳密に芸術的精確さを追求したナボコフは、同時に言葉遊びに淫する logophile でもあり、誤植がもたらす思いがけない効果をことのほか喜んだ。他ならぬ『賜物』の中にも誤植に関する言及がいくつか見られる。一つは、主人公フョードルの処女詩集に対する書評に関するものである。

> （……）小さな詩集については結局誰も書いてくれなかった（中略）。唯一つの例外はある短評で（書いたのはワシーリエフの『ガゼータ』の経済記者だ）、彼の文学者としての将来性について楽天的な見解が述べられ、詩からある連が一つ引用されていたが、ひどく目ざわりな誤植が残っていた。（第1章、邦訳91ページ）

---

[21] ナボコフは英訳への序文で、「私の息子、ドミトリー・ナボコフは第1章の英訳を完成させたが、彼が追求する職業上のやむを得ない事情に迫られて、翻訳を続けることができなくなった」と説明しているが、実際にドミトリーが第1章の翻訳をどの程度のレベルまで「完成」させたのかはよく分からない。いずれにせよ、『賜物』英訳全体に対するドミトリーの関与は低かったのだろう。だからこそ、訳者のクレジットにはドミトリーの名前は記載されず、前述したとおり"Translated from the Russian by Michael Scammell with the collaboration of the author"と扉に明記されたのである。この書き方は 1963 年の初版から、私が実見して確認できた範囲では、1991 年の Vintage International 版（ニューヨーク）まで変わらない。ところが、2001 年の Penguin Books 版になると――これにも Penguin Classics と Modern Classics の2種類があるが、そのどちらの場合とも――突然、クレジットにドミトリーの名前が付け加えられ、"Translated from the Russian by Michael Scammell and Dmitri Nabokov in collaboration with Vladimir Nabokov
"となるのである。私の印象では、ナボコフ夫人ヴェーラが 1991 年に亡くなったあと、ドミトリーは父の文学遺産に対する独占的支配の姿勢を強めていったのだが、これもその一環ということだろうか。

101/

Beethoven's, seatdd himself at the little Empire table, ~~cleared his throat~~ emitted a throaty ramble and unfolded his manuscript; his hands trembled perceptibly and continued to tremble throughout the reading.

From the very beginning it was apparent that the road would lead to disaster. The reader's ~~comical pronunciation was~~ Rigan's farcical acdent and bizarre incompatible with the obscurity of his meaning. When, already in the prologue, ~~a solitary Hollow Traveler" appeared, walking~~ there appeared a Lone Companion (odnoray sputnik instead of odinoty putnik, lone wayfarer), ~~along the road~~, Fyodor ~~in mistakenly~~ hoped against hope that this was a metaphysical paradox and not a traitorous lapsus. The Chief of the Town Guard, not admitting the traveler, repeated several times that he ~~[illegible]~~ would not pass definitely" (rhymes with "nightly") The town was a coastal one (the ~~Hollow Traveler~~ lone companion was coming from the Hinterland) and the crew of a Greek vessel was carousing there. This conversation was going on in Sin Street:

First Prostitute
All is water. That is what my ~~[illegible]~~ client Phales says.

Second Prostitute
All is air, young Anaximen ~~[illegible]~~ told me.

Third Prostitute
All is number. My bald Pythagoras cannot be wrong.

Fourth Prostitute
Heracles caresses me, whispering ~~[illegible]~~:"All is fire."

~~Hollow Traveler~~ Lone Companion (enters)
All is fate.

- There were also two choruses, one of which somehow managed to represent ~~volnu fizika de Broil~~ the De Broglie waves and the logic of history, while the other chorus, the good one, argued with it. "First Sailor, Second Sailor, Third Sailor," continued Busch, enumerated the conversing characters

『賜物』英訳タイプ原稿とナボコフ自身による手書きの修正
（ニューヨーク公立図書館 Berg Collection 所蔵）

ここでは、それがどんな「誤植」か、それ以上の説明がないだけに、「ひどく目ざわり」な誤植とはいったいどんなものか、かえって気になる。ひょっとしたら Thales を Phales としてしまうような誤植ではなかったのか？　いずれにせよ、詩の引用の際の誤植なので、ブッシュの詩の英訳の際に生じた誤植のことが、どうしても連想されてしまう。

誤植に関するもう一つの言及は、第 4 章のチェルヌィシェフスキー伝の中に現れる。

> (……) しかし、誠心誠意からのロシア流ヘーゲル主義の時代は過ぎ去ってしまった。人心の支配者たちは、命を吹き込む力を持ったヘーゲルの真実を――それは浅い水たまりのように淀んだものではなく、認識過程そのものの中を流れて行く血のような真実だったのだが――理解できなかった。お人よしのフォイエルバッハのほうが、チェルヌイシェフスキーの好みにかなった。しかし、宇宙的なもの［コスミーチェスコエ］、思弁的なもの［ウモズリーチェリノエ］から、一文字抜け落ちただけで、滑稽極まりないものに変わる危険は常にあったし、この危険をチェルヌイシェフスキーは避けなかった。実際彼は、「共同体的所有」という論文の中でヘーゲルの誘惑的な弁証法の三段階を利用し始めるや、世界のガス状態が正［テーゼ］だとしたら脳の柔らかさが合［ジンテーゼ］だ、といった例を挙げ出すのである。もっとばかばかしい例としては、棍棒がライフル銃に変身する、などというものもあった。（下線は沼野による。邦訳 385 ページ）

引用箇所の下線部が、誤植に関する部分である。ロシア語の綴りに基づいた言葉遊びなので、日本語には翻訳できない。ロシア語では、「宇宙的」космическое 、「思弁的」умозрительное を意味する形容詞からそれぞれ一文字が脱落しただけで「コミーチェスコエ」комическое（滑稽な）、「ウモリーチェリノエ」уморительное（とても可笑しい）を意味する形容詞に変わってしまう。英訳では前者は同語源の言葉があるため cosmic→comic として対応させているが、後者（「思弁的」⇒「とても可笑しい」）のほうは対応させられる例が思いつかなかったのか、翻訳を諦めて省略している。不思議なことに、一文字脱落したり変わったりしただけで（Thales⇒Phales の例もそうだが）、意味が正反対になったり、とんでもなく変なことや、冒瀆的なこと、猥褻なことになったりする現象はしばしば起こる。ソ連時代にも、時の権力者に関する文章の中で、たった一文字の誤植を見逃したために、収容所送りになってしまった編集者の例などが、アネクドートとして知られているほどだ。アンドレイ・タルコフスキーの凄絶なほど美しい映画『鏡』でも、新聞社に勤める主人公の母親が、帰宅後、不安に駆られて雨の中、会社に駆けつけるという忘れがたいシーンがあるが、あれもおそらくその類の誤植の恐怖からのことだろう。ロシア語ではスターリンの名前の綴りを一文字間違えただけで、「くそったれ」のような意味の言葉になってしまうのだ。

ナボコフが誤植を文学的手法として使ったもっとはっきりとした例は、『賜物』の英訳が出版される直前に彼が英語で書いた小説『青白い炎』(*Pale Fire*, 1962) に見られる。この作品の冒頭に掲げられる、ジョン・シェイド作の長編詩「青白い炎」では、臨死体験の際に幻のように現れる "a tall white fountain" (高く白い噴水) のイメージが重要な役割を果たしているのだが、心臓の応急措置で蘇生したZ夫人の経験を伝える雑誌記事にはじつは誤植があって、本当は fountain (噴水) ではなく moutain (山) だったことが分かるのだ (シェイドの詩 800〜804 行)。そしてキンボートがこの詩の 803 行につけた注釈は、「誤植」(a misprint) と題されていて、皇帝の戴冠式についてのロシアの新聞記事で生じたという、もっと可笑しな例が紹介されている。korona (王冠) と書くべきところが、誤植で vorona (カラス) になってしまい、その誤植を訂正しようとした新聞はまたしても誤植を出して、今度は korova (雌牛) にしてしまったというのである。キンボートはさらに、英語でも crown-crow-cow という一組ができるので、ロシア語の korona-vorona-korova のセットとの間に、「わが詩人」(つまりシェイド) を狂喜させるような「芸術的な相互関係」(artistic correlation) があるという注釈を加えている。[22] 誤植によって生ずる意外なイメージ・意味の衝突、さらには複数言語間の言葉遊びの照応は、架空の詩人シェイドの好みというよりは、まさにナボコフ自身の偏愛の対象だった。

ずいぶん言葉を費やして、ここまでやって来た。これまで考えたこと、調べたことを総合して、『賜物』の娼婦たちの会話に見られる誤植問題に関する私の見解を (これまた証明しようのない憶測をふんだんに盛り込んで) まとめれば、以下のようになるだろう。

(1) 下訳者による英訳をナボコフが点検したとき

A ナボコフは間違いに気づかなかった。⇒さらに編集者、校正者も間違いに気付かず、そのまま印刷されてしまった (私はこれはありそうではないと思うが、その可能性ももちろん排除できない)。

B ナボコフは間違いに気づいたが、このほうが面白いと判断して、直さないことに決めた。⇒編集者や校正者は「間違い」に気付いた可能性が高いが、ナボコフは直さないようにと指示を出した。

(2) TLS の書評で「誤植」が指摘されたとき

A (1)A を受けて——編集者が慌てて、誤植を改訂した第2刷をすぐに刊行した。その際、ナボコフがどう思ったかについても 2 通りの可能性が考えられる。

(2)A-a 誤植なのだから、しかたないと思って素直に訂正に合意した。

---

[22] Vladimir Nabokov, *Novels 1955-1962*, New York: The Library of America, 1996, p. 627. 邦訳はナボコフ『青白い炎』富士川義之訳、筑摩書房 (ちくま文庫)、2003 年、449 ページ。

(2)A-b 誤植の指摘にかちんときて、素直に直したくないと思った。改めて考えてみれば、これはブッシュの間違いなのだとしたほうが面白いと判断し（ダピーの書評に助けられた可能性がある）、訂正しないでおこうと思ったのだが、イギリスの編集者がナボコフの了解も得ずに慌てて改訂した第2刷を出してしまった。

B (1)B を受けて——ナボコフはかちんと来て、絶対に直すものかと思った。そしてダピーの書評が出てしめたと思った。ところが、イギリスの編集者がナボコフの了解も得ずに慌てて改訂版を出してしまった。

(3) イギリスで改訂版（初版第2刷）が出たあと

A (2)A-a を受けて——ナボコフは安心した。一件落着。

B (2)A-b および(2)B を受けて——ナボコフは最初、自分の了承も得ないで「誤植」を直した編集者に対して腹を立てただろう。しかし、いまさら誤植の訂正の訂正をするのも厄介だし、まあ、このままにしておけばいいか、と考えた。

どうだろうか。やはり常識的には(1)A—(2)A-a—(3)a という流れが一番穏当な解釈だろう。私自身もそのことは認めたうえで、それでも(1)B—(2)B—(3)B、または(1)A—(2)A-b—(3)B の流れにどうしても心惹かれてしまう。ナボコヴィアンの性というべきだろうか。そこで最後に、「穏当」な解釈を否定するために、私の憶測に有利となる証拠をもう一つ提出しよう。前述したように、イギリスでは *TLS* の書評が出た直後に Weidenfed & Nocolson 社は「誤植」を改訂した第2刷ハードカバーを出版し、その後出た様々なイギリス版も私の調査した限りではすべて、それを受け継いでいる（1966年の Panther Books 版ペーパーバック、1970年 Collins 社によるナボコフの5つの長編を一冊に収めた Collins Collectors' Choice 版、1980年の Penguin Books 版から 2001年の Penguin Books 新版に至るまで）。ところが、アメリカ合衆国では、Putnam 社が 1963 年に出したハードカバーは結局のところ「誤植」を訂正しないままで通し、さらにその後 1970 年に出た Capricon Books 社のペーパーバックも、その表紙・レイアウトをそのまま引き継いだ1979年の Paragon Books 版も（1982年の第4刷まで確認済み）、「誤植」は直していないのである。私が確認できた限りでは、アメリカで最初に「誤植」を訂正したのは、1991 年の Vintage International 版である。つまりアメリカでは「誤植」は 1963 年の初版以来、ナボコフの生前はついに直されることなく、1991 年までアメリカの読者は「ファレス」「ヘラクレス」と印刷されたバージョンを読んでいたのだ。

いったいこれは何を意味するのだろうか。これまた一番穏当な考え方は、こんな些細な誤植のことなど、ナボコフ本人も、アメリカの編集者も忘れてしまい、そのままずっと放置されただけのことさ、という解釈だろう。しかし、この「誤植」はナボコフの小説にとって、はたして些細なことだろうか。『青白い炎』の読者ならば、こんなことを夢想して

もおかしくないのではないか――ナボコフは『青白い炎』において、「高く白い山」が「高く白い噴水」と誤記されたことを言わば文学的手法として利用した。彼はそれと同じような「手法としての誤植」を実人生においても、自分の小説の誤植とその改訂を通して試みたのではないか。イギリスでは誤植と見なされて訂正されたがそれもよし。アメリカでは誰も気づかないままなので、訂正されないままになったが、それはそれでよし。誤植が改訂された版と改訂されない版が並行的に存在するという事態が、読者たちにどのような反応を引き起こすか、作品の解釈にどのように影響するのか。そのプロセス自体が作品を「後熟」させ、より豊かにするのではないか。

疑問文の多い締めくくりになったが、それは拙論が証明しようのない憶測ばかりだからである。しかし、たとえナボコフを「高く白い噴水」の国から呼び出したとしても、問題は決定的に解決しないのではないだろうか。ここで問題になっているのは、様々なテキストとそれを読む読者の反応の相互作用が織りなす絵であって、作者の意図もそこでは模様の一部に過ぎないからだ。

キンボートの言葉を借りて言えば、ナボコフは誤植が「語彙の遊び場」(lexical playfields)で引き起こす意外な発見の喜びを知っている作家だった。

Поэт в изгнании, проститутки или Набоков: кто виноват?

(О некоторых «опечатках» в романе «Дар»)

НУМАНО Мицуёси

В данной статье рассматривается вопрос о некоторых «опечатках», обнаруженных в английском переводе романа Владимира Набокова «Дар». На литературном вечере русских эмигрантов некто Буш, поэт из Риги, читает следующие стихи из своей поэмы:

Первая Проститутка
Всё есть вода. Так говорит гость мой Фалес.
Вторая Проститутка
Всё есть воздух, сказал мне юный Анаксимен.
Третья Проститутка
Всё есть число. Мой лысый Пифагор не может ошибиться.
Четвертая Проститутка
Гераклит ласкает меня, шептая: всё есть огонь.
Спутник (*входит*).
Всё есть судьба.

Однако в первом издании английского перевода романа данный отрывок был переведен молодым американцем Майкэлом Скаммеллом следующим образом:

FIRST PROSTITUTE
All is water. That is what my client Phales says.
SECOND PROSTITUTE
All is air, young Anaximenes told me.
THIRD PROSTITUTE
All is number. My bald Pythagoras cannot be wrong.

FOURTH PROSTITUTE

Heracles caresses me whispering "All is fire."

LONE COMPANION (*enters*)

All is fate.

Очевидно, что здесь есть две кричащие ошибки: «Phales» должно быть «Thales», а «Heracles» — «Heraclitus». Хотя машинопись английского перевода, сохраненная в архиве Нью-Йоркской публичной библиотеки, показавает, что это ошибки переводчика, не исключено, что Набоков, проверяя перевод, нарочно оставил эти ошибки и хотел приписать их Бушу.

Автор данной статьи рассматривает разные возможности интерпретации этих «опечаток», проверяя все главные издания английского перевода и ссылаясь на рецензии в Америке и Англии, и предлагает гипотезу, что Набоков пользовался опечатками как своего рода «литературным приемом».